

# 提言

参院選狂騒曲があまりにも悪劣でかまびすしかったためか、あのステイツマン(Statesman)という言葉の本来の気高さにあらためて身を切られるような思いのする当分である。今回の参院選選者のなかに、はたしてステイツマンと呼ぶにふさわしい人物が何人いるだろうか。ステイツマンとまではいかなくともポリティシャン(Politician)でもいいのだが、ポリティシャンと思える人物も寥寥たるものであるような気がする。

こんなことなら、戦前の貴族

院の方がはるかに政治の正道に近かったのではないか。参院を直接選挙にしないで、各界の代表からなる合理的な指名制度によるものにしたなら、少なくともいまの参院よりはるかに立派なものになると思ふのだが、そのような提案は、憲法改正にもつながるなげだ、タヌーのようになっていっているようだ。

## 自民党は本気で自己点検せよ

それにしても、今回の参院選での自民党は醜態であった。まるで現代の衆議院政治でもあるかのように芸能タレントや金権候補をかき集めた感に当初からぬぐえなかったし、徳島地区のゴリ押しもまづいことは最初から

わかっていった。それに選挙の垂本戦略として、「自由社会を守れ」のスローガンを打ちだし、自由社会を侵す共産党を自の敵にして反共キャンペーンに徹したことも問題がなかったか。つまり、自共対決というね追われすぎたのではないかとこのうに思われる。

ことである。

選挙結果を見ると、共産党は躍り増にもかかわらず、一方でその頭打ちも明白であり、国民の大多数は共産党政権をけしんて望んではいない。たとすれば、自民党は、まさに執政党としての責任と自信を失いついて、

らの辞任劇だけにとどまっていようでは、まことに残念である。

そのような折りしも、近著の『自由新報』(七月二十三日出)は「社説勝利」は下リックと大見出しで選挙結果を分析し、社説は「得票率も大暴落」となっている。なにをかいわんやである。たしかに、この『自由新報』のいうとおりかもしれないが、いまの自民党にとって他党のことほどでもない。本気で自己点検しなければならぬのである。桜田武・日経連会長までさえも、自民党幹部は責任をこれと強く批判しているではないか。

の思惑がからんだ福田、三木氏